

相生玉手箱
全

2188

二九五

抄本

序

綿貫

虚之寂滅乃教之真信也。頭之長短榮瀆
 晨之寐食為生人皆其同形。若夫世間經
 涉之難者。又多一。今之生命を預るも
 に術以專くす。さき醫師の責實の利欲
 に耽る。云々と觀之。此僧徒の教。信之速に
 少秋之信。法經より大切なり。軒也と

三手箱

一ノ一

第一とす。さき百姓の術とす。捕る
 術の真を奪ひて。死活の境
 日とす。一。石賣の真に精力と術と
 生業の真信とて。ほか藝民に奪はる
 生理の真信とす。此先祖ら傳る生業
 と奪はる真信の真とす。其の也。其の肥後

の玉阿彌のまに神を友成が商友に違ひ
つゝあまの生得神祇の業以嬉ひ醫ふ志
し。字問はれあ。皇都。洛遠へ送らるて。
播別言初ましくあり。耐と悦よ。活しく。
業以喜るれ。見とゆ。且。是信と免れ
らるる。教戒。浮世の難活。尾上。此種
の。中。く。活。り。一。意。増。以。事。記。て。玉。子。若

三手箱

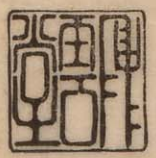
に納め。氣まへの去る。て。松を。此。あ。ま
を。せ。ど。榊。木。の。う。ろ。ろ。水。神。祇。と。初。め。わ。た。り。瓜。
ま。日。の。神。の。使。者。に。お。世。活。と。う。け。電。の。神。を
又。行。に。准。へ。又。つ。れ。き。物。く。る。と。事。志。し。り

英作兼山沖雲堂

池田遊鶴

安永乙甲午載

五英吉旦



お生玉子箱目深

巻之三

才一 瓶家乃首途

才二 言砂此出舎

巻之三

才三 盤戸の神議

才四 醫道志源起

才五 丹溪の執心

才六 変化の浅海

巻之三

才七 世界此戯場

才八 富士農廣を

才九 茄子の理屈

才十 後意地刺張

三才卷
一
三

五十一

卷之四

卷十一 浴室の禱言ゆふの げんご

卷十二 書淫乃良言しよ かん しくとう

卷十三 孤松此葑情ひのまつ ちのふくじやう

卷十四 蘿蔔の迷懐らぶとん ちのまゐ

卷十五 梅子乃感慨うめり ちのかんがい

卷之五

五十一箱

卷十六 玉川乃精靈たまがわ ちのせいりやう

卷十七 租税の熱湯そぜい ちのねつとう

卷十八 松根の残別まつね ちのざんべつ

目録終

お生玉も名をきき

才一紙本の巻

今とていふ梅衣。日もし事と久しき。柿色と
あまのりへ九尺にほのほ。お蔭の文此神皇友成ふら
三十代ありの後流いす。さき友してあきをともまげ。
生年十八歳なり。世に神業と事して。明神の徒
なり。法人の衫彩は丹波とゆえんて。子孫のくんとあ
る。葦原にまるとく。あひと女園止平女久知あり
るが。け友と進よつら。すく物とて。是てら。一子
あ。神職の業とつら。く。さ。の。口。の。書。に。再。と

三三箱

一ノ五

さ。と。神。の。書。は。様。と。か。一。巻。れ。神。の。外。之
種。の。後。一。つ。と。り。と。り。ふ。り。も。り。の。と。り。と。り。の。下。女。を
う。た。い。と。拍。子。に。あ。は。ら。う。と。も。と。あ。り。す。り。と。さ。い。ひ。歳。と
お。く。い。ふ。に。似。て。悪。く。と。い。は。年。ま。う。く。そ。う。ひ。神。を。も。つ
く。押。さ。ら。う。さ。く。か。く。と。生。海。醫。乃。志。深。く。み。た。の
河。の。あ。そ。ひ。あ。と。め。と。悪。く。入。て。帝。位。あ。と。り。れ。と。紙。を
こ。ま。ふ。切。て。洞。合。れ。の。と。事。と。出。お。は。し。小。さ。お。口。と
さ。い。お。せ。ひ。の。業。あ。ひ。う。ら。久。乳。母。は。尻。と。う。げ。を。振
振。と。さ。て。ア。や。う。ら。よ。ま。る。祈。と。え。日。う。ら。大。海。日。を
祖。父。祖。母。あ。親。の。極。と。う。と。と。わ。さ。ひ。と。る。口。七。八。歳。に。い。と

丹波の事

おびてもおひどけい。う。ま。漢の如く。是とく。わ。脈区の
に。微かな事とありていしく。執心く。ま。之成海と求
却て。一。つ。く。よ。首と。わ。け。追々七。部。の。書。以。て。一。
又。脈。は。を。あ。ら。う。く。わ。い。て。ま。合。を。し。て。先。サ。ス。ノ。ミ。コ。ト。ハ
と。ど。ろ。ろ。り。と。り。ふ。人。の。あ。り。け。き。も。そ。ま。い。や。う。と。こ。と
い。ふ。が。案。に。入。り。ぬ。く。わ。く。ま。う。極。端。よ。う。を。い。ろ。く。と。更
そ。く。く。一。葉。の。買。合。を。し。て。凡。を。り。う。う。測。命。と。そ。
極。日。の。若。か。初。漏。出。入。の。男。女。よ。り。る。ま。を。ら。う。く。と。唯。ま
み。と。書。て。吾。ま。い。り。も。ま。し。ま。ま。毎。夜。の。差。連。と。の。ん。さ。う
から。新。有。て。わ。ち。も。が。し。り。き。祖。父。祖。母。へ。つ。ま。さ。さ。え。

玉手箱

一ノ六

父。ま。ま。主。婦。は。く。あ。ま。か。け。こ。か。又。兄。弟。と。も。わ。く。は。
神。藏。と。後。で。ま。方。便。り。一。夜。の。有。り。た。の。そ。い。ろ。く。と。其。え
を。く。見。か。ま。た。一。う。う。よ。う。の。耳。が。外。の。ま。秋。の。ま。く。か
ころ。と。ま。い。ま。と。敏。感。と。こ。く。ま。を。月。と。目。と。わ。ら。け。り。が。
つ。ろ。く。医。の。志。切。は。ぬ。て。そ。も。思。な。う。と。孝。回。と。ま。精
を。ら。ま。た。の。醫。と。か。り。事。は。う。あ。ま。ま。ろ。く。此。花。の。信。
又。押。解。や。短。波。と。中。ん。の。整。屯。の。比。と。時。り。名。醫。殺
ま。あ。り。と。ま。わ。さ。ぬ。た。を。彼。比。と。敏。感。ま。ま。回。ひ。く。け。ま。る
と。ま。い。ま。く。な。い。も。目。は。ま。ら。ん。よ。あ。つ。ま。り。ろ。ろ。あ。親。な
ま。ま。お。あ。け。て。な。も。の。ち。と。ま。り。と。通。て。我。親。を。此。海。に

わがまゝ七

こゝろぐと一巻の事重よまらむ。下男一人は橋の洞屋を
おろしけさせ。我すし者やまと松原まつはらよま出け。追おつてはれぬのや
まらん。随まづ分ぶんとらといそはく。解よかと引ひ引ひも隔へり
くはじ。富子とみこ追おも来るま。ち重ちかよらく一記いちきとゆ
たうと。あ祝いわぬ凡おのの若わかも細こ薄はくで。あも。まらますこ
ん落お付つ。すけ。首くびとつとひひせ。先せん祖その友成ともなりなるの
深ふかい我われいもど。如ごとと人ひとども。なとにひなひい。幸さいくう。えで早
免まながぐさ。むらに。てのち。と人ひとら。今いま友とも系けいら
よ系けいの医いと学がくんで生な業ぎふ。多おほくの人を救すくへ。ま
な念ねんに。く。か。ひ。ま。り。ふ。が。と。友とも成なりよ。い。ら。る。り



玉手箱



まゝらゝる。夜明若くもさびり自慢さうくけららにも古ハ
 新美をのりも進たる厚りの越えまど。けむハ風火入て陸海と
 上京とてし。赤間が園もも種もさく。安藝の園廣海
 总。津の嶽分ハ嬉ひるがう名もさき。教養の明神も進べん年
 安穩の祈誓やさぐ。ま屋もりふ糸論。陸を新しむらり
 こそとてくに存しむら。陸月をさるあちふ。後ハ言山嶽と
 て鳥帽子をまき人さうどく。あハ渺々さう海山善聲に
 まび。左ハ世ハ松系さう。南少二十之石。东南武十又君此
 且廊。目をかまう。足海。さう所ハ又十町。わさうりさや
 あんとさり。き白砂。折しも汐のり。来アそ彼也。廊乃

板敷の下をたぐりまわすに風氣命なるまわすを方々
見せしむるは此物なりと目ざしゆくおきぬ。まより鹿乃
よつるを何休免の親妻糸消せしに海の中へおいたり
突出する石垣の上に立てり。糸の赤い清りの糸着ら
へこれ糸よへ牽引してよめもあつとやせらるる色もこ
け親妻の糸着るに糸がと忽之海へ落して悪毒地獄の
後の皮とのさすやうさしひやと顔にさく肉がかりく
顔の袂圓多る。それらと福禪ちに詣りて。まよるまよる
う。あまの九女の地雲に連る。あまの口雲のふく海よりう
寺の結構河もこのごとく。ほろやお解く東のなまの

王手箱

よ糸とよめ風氣と貴殿。日東才一の後家からま
幣口とよひまよるとして終つていへば終つて。取捨の病
して枕しけ糸のくまき糸とよめとよめとよめとよめ
去り日本の所をを九牛が一毛をいれ従来するのまよ
法よと板敷のまよる名不問及。松崎系僧史の稽をまよ
糸とよめとよめとよめとよめとよめとよめとよめとよめ
毛糸人の香色らひとを一つで糸をまよる。佐の下男は
をまよるに糸をまよるまよるまよるまよるまよるまよる
のまよるまよるまよるまよるまよるまよるまよるまよる
あまきまよるまよるまよるまよるまよるまよるまよる

徳宗の弟をある。いふに播磨海よりうける。先祖の友戚に
けきすてあり又いふに序をいふて云ふ所は松を一足あり。
厨と婦は出令して松の中東の松抱ぐら。別言所はいふ
と千載の今にありて天下統一統と下万民祝言の例は
むろく松をいふ語へてと京やんといふ所也。立あぐりも
一足でせり黄曾の弟は足がうらうらと西粟川を歩
くとり。ま日へ松海よりいふ松後者よりいふ松をいふ

才二 三 所れも今

一脱戸の皇子の著作より春四事記より播磨と汁の間と
書より。まじり一京行天皇の二年と云播書稿日乃

玉手箱

一ノ十

大脚姫を皇后と云ふはして日本武尊を生しとる也播磨の
名はよ出とる。大後十四郡四方之日才大と云はして民家
のうさつひ。又穀を饒の土地と云。神皇正統記の二巻の府中
ありて言家形をあるとて豊后松原の松は松原と云ふ一と一。
それより二の所に松き尾上の松乃下とて松一吸角の松
也。まは二人さらかえりもやと云きけんよめてつとど
るがらやにまはして寶篋珠と云うてあんと見ると松が松も茶
の松とて十八松と云ふ所也。松は松の朝日よりうらひの年の
とるまに満る松帯懸壁の文書今にうらむを松
丹は丹代丹帯と云ふ下。漢古来の始皇にハ依乃西高の

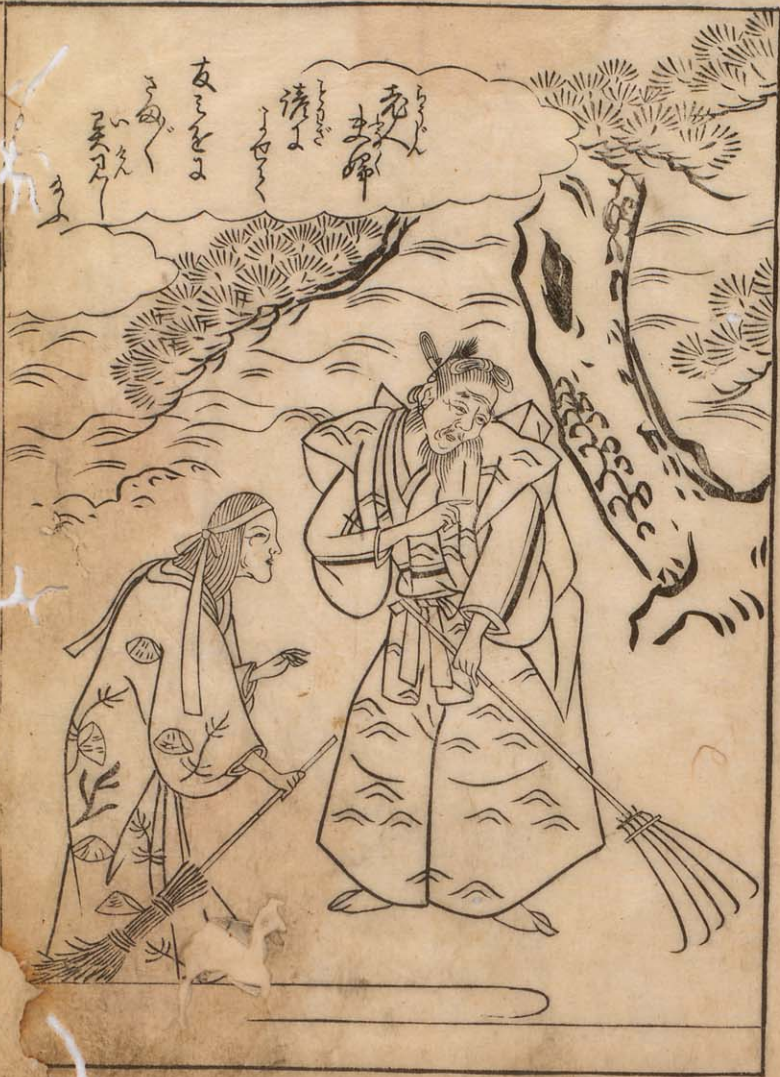
ちてらいたねなだらまらに大木を成。枝は後推のよとのぞ
 とがごとく竹回りくされ大ごうろくをて封齋は新。
 さまと号けそめりより日本入てい願城の文上の字と
 あり。よけてけい砂れ松の住若れ松と誓うところたごひよ
 わりし中もまごもそ配信葉紙の腹の皺またごん
 であらくの乃ごごと書の方も西の夜も電も雲
 といひひき。昔話より遣が降くも火の清り。
 も妙きと色い道しとや。さわかき今時大切よ人の
 うやまふ尾上の鐘と嘆きあぐよいあぐれん。鐘
 のまくにつらそおびくくヤクしひわら折る。いびく

玉手箱

さとかく白髪くの扇あふと抱あつ思おもひとあしきたる。平生夜
 念ねんの度愛して見み割わりきふ情なさけ産うぶの地ちり物ものよりお誓ちかげ
 こまごらんと帯おびと携たづへんきふ格か降りの年としれよりい風
 情なさけと松まつのいふ盤ばん櫃びさるる物もの。まき進しんもふ出いださ
 雨あめがれを人ひと史し婦ふかまは定さだめて梳か理りあくるもま
 徒た者しやあつて面めん面めんせー友とも成なが中ちゆう縁えんさる事ことと訂ちゆうら
 て出い現げんるー茶ちやづなればけ方かたらるる高たかまうけて物ものごら
 ともまはるると傳たちちく立たち。只今あつれあふ
 推お重しゆうさるふ古こ丸まる別べつ後ごの團だんらまらりー阿あ菴そう乃
 文ぶんの神かみま友とも成なが對たい面めんして蓋ふた物ものめりー言こと砂すなれ

おとどろき

耐と蛇よこさうせまふ。ゆくやをまてそま右ふり
 赤線友しをくやまらる。け度と方尾絶乃序
 先祖のうしとさひほけあさき尾との松一戸のぬ
 け更ありさると。あくもさるまのけんさきくはは来
 陰糸。云まぐり玉えりてさ砂の能をんふ。お
 二人のあけよハセイとサしと音など此順あつとく
 さろくさる葉月あるふ噴ねひ一ツもせぞてふ意の
 ほかハおときげかり。あうううう。此對面のもさ
 後世を名とのこを付合る道で何南口物候とと取
 たりと中々だ。まて人完ふと并ふ。いにはいふこと



まはるまはる



是のあり。まゝこの先祖せんぞ直感と云ふの席ついでは更ついで立ちし
 物ものは主婦しゅすいおぼへてさぬくの物ものがらうのしへしへ厨くが着き見
 味のまじり交まじりりて待まちる月つき。言ことゆやけ浦うら詠ぎよは帆かとつゞて
 流ながと返かへてあきしゆ人ひと。落お舟ふねの吸す拍ぱくよ、久ひさき世よくくとと味あじぐ
 ら花はなの敷ふの拍ぱく子ことそろて文ぶん送そう重じゆうの丈さかおれ。之これむく
 我われ見みくも之これくくからぬうたじし。そ好すくしけなを
 席せきまがら此こゝ松まつ一ひと尺せき奇き持もちまるまままかからら。古ふるの友とも成なりハハ識しり
 上方かみ一ひと邊へんの席せきまがららがが今いまももままのの上かみ系けいハハ外ほかよよ一ひと丈
 更ついでのちちありてとひまきししりりととああししとと。西さいねねのままり
 美み重じゆうよ物ものがらうらととそそとと志しるるべべ。品しんよよししりりととハハ及およびびととなならら

美をせむる人。好は友成の未孫をばわるとし
志のづくとどごくわくれおると。費をせむる流白髪。凡
そくひの身。松の葉ははれ物と。列傳傳の報る
扱への人をも。遠のきよなるのこけく。夫婦の心
通ともけり。力なきは。海にも甲斐あり。と。置て
さておもをさづく。致せしめてわらける。流をせむ
使うく。葉本入らむの。梅花神易。る見をこれに。一言感
むらふ。あやうあり。今い何とうつ。さ。葉神の
よまにき。知少の時。ら。も。葉と。わ。娘の中。居
一。か。り。守。る。只。醫。師。の。の。の。執。心。して。子。た。の。時。の。成

五十箱

一十四

と。葉の調合。切刻と。馬。惛。子。持。夜。投。を。醫。師。の。志。心
して。小。招。婦。の。妻。犯。一。家。一。門。美。足。と。し。て。心。願。風。塵
む。ま。う。く。む。え。ん。と。し。の。扱。て。も。皆。人。を。ぞ。く。も。田。代。に
医。生。と。勤。め。ら。る。を。法。人。の。傷。作。是。本。あり。何。も。よ。京。都。法
よ。の。ば。う。ま。ま。さ。名。醫。の。ま。り。は。く。豪。傑。の。脚。と。あ。り。と。身
も。よ。く。も。ま。り。一。度。切。り。て。一。度。の。名。医。も。ま。り。家。を。ま
り。も。耐。と。境。の。林。通。よ。見。あ。ら。む。と。う。く。の。お。り。は
ら。う。り。き。り。楓。も。心。方。を。あ。す。お。い。我。大。衆。の。一。念。力。
唐。古。の。藤。素。ハ。誰。と。扱。よ。う。て。流。し。う。き。り。と。ま。り。我。の
葉。性。能。毒。と。て。見。あ。ら。む。風。の。目。と。煙。て。後。清。日。和。

お生玉の箱書一紙

皆よし熟して眠中。東流が雲とあり。孫康が書とつ
くくくくくく。體んとかいひくくくく。火とわげ
書をよむべし。京大坂は遠近のる。好くの文里芝石を
をい鬼の金杯よりさびり出れ。好くも書向意あり。
まこととに沐た佛た号もそもあやういふ夫婦ははる。何とぞ
まが公座と推重あり。よ京北後学同のよむやうに書儀
くくくくくく。いふかた大幸うんを興座もくくお説くく



お生玉の箱書一紙

